

横須賀市史 目次

題 字

自治庁長官 田中伊三次

序

横須賀市長 梅津芳三

口 絵

凡 例

目 次

第一編 横須賀市の成り立ち

第一章 横須賀市の生活舞台

第一節 東京湾口を扼している横須賀

第一 房総半島への廊下(古代)

第二 鎌倉の外圍(中世)

第三 江戸と東京への海の関門(近世・近代)

第四 横須賀の現代的位罫

第二節 三浦半島主要部にひろがる市域

第三節 列状にならぶ山と川……………二五

第一 西北——東南方向をとる山と谷……………二五

一 いわゆる断層地形について……………二 おもな谷系……………三 山地や台地の細部の地形

四 宮田断層と三浦半島南部の地形……………三

第二 海底から山地・台地・平野のでき上った地形発達史……………三

第四節 本州の成立に結ばれる地質……………三六

第一 縞状をなす地質配列……………三七

一 葉山層群……………二 三浦層群……………三 洪積層……………四 火成岩類……………五

第二 寄木細工のような構造……………三七

第三 低湿性と強い粘性の土壌……………三七

第五節 それぞれ特色のある三つの浦の海況……………三八

第一 好錨地の内浦と海底峡谷の発達している下浦……………三八

第二 海底段丘（海段）と海谷の発達している西浦……………三九

第三 海流の影響の少ない横須賀海岸……………三九

第六節 房総に似ている気候……………四〇

第一 暖国型の気候……………四〇

第二 北風の多い風……………四一

第三 内浦に多い降水量……………四一

第四 東京湾岸型と湘南房総型に分けられる気候区……………四二

第七節 南暖帯性と暖流性の生物……………四二

第一 房州より少ない暖帯植物……………四二

第二章 横須賀の発展……………四三

第一節 石器を使つた時代……………四三

第一 平坂人骨の出土……………四三

一 出土の事実とその報告……………二 平坂貝塚と出土品……………四四

第二 石器を使つた人達の遺跡……………四四

一 貝塚……………二 土器の編年……………三 その他の遺跡……………四五

第三 生活のあとをたどる……………四五

一 時間的分布……………二 未解決のことども……………四六

第二節 猿島洞窟時代……………四六

第一 猿島洞窟遺跡……………四六

第二 同時期の遺跡分布……………四七

第三 遺跡遺物から考えられる生活……………四七

第四 先行の弥生式文化とその分布……………四八

第五 伝福寺裏の遺跡……………四八

第六 弥生式文化の古さ……………四九

第三節 大塚古墳時代……………五〇

第一	大塚古墳の存在	二六
第二	同時代古墳・横穴とその分布から考えられる村落と開拓	二九
第三	先行の文化	三〇
第四	古墳時代後期の生活	三六
第四節	宗元寺時代	三〇
第一	宗元寺跡	三〇
第二	寺跡復原	三〇
第三	宗元寺のころ	三〇
第五節	衣笠城時代	三六
第一	武蔵の東海道編入後の旧街道	三六
第二	関東特に南関東の事情	三六
第三	三浦氏基礎時代	三六
第四	この時代をしのぶもの	三六
第六節	三浦氏時代	三七
第一	鎌倉幕府と三浦氏	三七
第二	三浦氏滅亡とその後	三七
第七節	新井城及び三崎城時代	三七
第一	三浦道寸のころ	三七
第二	そのころの横須賀	三七
第三	三崎城時代	三八
第四	北条氏滅亡後の三浦	三八

第八節 浦賀奉行時代

第一	徳川氏直轄地と検地	三八
一	代官長谷川七左衛門長綱	二 検地
第二	ウイリアム・アダムスと浦賀港	三八
一	ウイリアム・アダムス	二 浦賀の港
第三	走水奉行と燈明堂	三八
一	走水奉行	二 燈明堂
第四	内川新田の開発	三九
第五	浦賀奉行の設置	三九
第六	異国船来航と沿岸防備	三九
一	異国船の来航	二 沿岸の防備
三	ペリー艦隊の来航	四〇
第七	諸大名の領地となつた三浦半島	四〇
第八	庶民の生活	四一
一	農民の生活	二 漁民の生活
三	町人の生活	四 文化の生活

第三章 明治時代の横須賀

第一節 製鉄所の創設と発展

第一	製鉄所の創設	三三
一	大船禁制から解禁へ	二 洋式艦船の製造
三	艦船の購入	四 艦船の修理の要求
五	横須賀製鉄所設置の企図	六 小栗忠順の活躍とフランスへの依頼
七	建設計画とその実施への運び	八 横須賀製鉄所起立原案
九	横須賀製鉄所の鉄入式	三六
第二	建設期の造船所	三六
一	フランス人の手による建設着工	二 製鉄所設立とその組織
三	明治政府の製鉄	三六

所接収 四 製鉄所から造船所への所管の変遷 五 建設事業の概観	二四三
第三 海軍の伸展と海軍工廠の拡充	
一 海軍工廠への変遷の概観 二 海軍の発展 三 横須賀鎮守府造船部	二四三
四 拡張期の造船廠 五 海軍水道の創設	

第二節 横須賀村の伸展	二五七
-------------	-----

第一 横須賀町への発展と町域の拡大	二五七
-------------------	-----

一 維新前の横須賀 二 王政復古から廃藩置県まで 三 大小区制の変遷	二五七
四 三新法の制定とその後の変遷	

第二 交通や通信制度の整備	二七
---------------	----

一 浦賀道と三崎道 二 人力車と馬車そして自動車 三 横須賀線の開通	二七
四 水上交通と燈台 五 郵便と電信の発達	

第三 新しい教育の確立	二九〇
-------------	-----

一 寺小屋から郷学校へ 二 学制とその実施のころ 三 学制頒布から教育令の施行のころ 四 教育方法の近代化 五 国家主義教育の芽生え 六 中学校の設置 七 産業教育の創始	二九〇
---	-----

第四 文芸や芸能の発展	三〇五
-------------	-----

一 横須賀に描く文芸作品 二 横須賀俳壇の素描 三 横須賀に残る芭蕉句碑	三〇五
四 軍楽隊と大衆の歌 五 邦楽と舞踊	

第三節 横須賀市の新しい出発	三〇
----------------	----

第一 市制施行までの情勢	三〇
--------------	----

一 市制施行への前進 二 市制施行までの曲折	三〇
------------------------	----

第二 市制施行	三二七
---------	-----

第二編 市制施行五〇年

第一章 市政及び財政の発展	三七
---------------	----

第一節 総説	三七
--------	----

第一 地方自治制度の変遷	三七
--------------	----

一 当初の「市制」 二 「市制」の改正 三 「地方自治法」の制定とその後の改正	三七
---	----

第二 本市政及び財政の特殊性	三二
----------------	----

一 日本海軍との関係における特殊性 二 転換都市としての特殊性	三二
---------------------------------	----

第二節 市長二一代にわたる市政	三四
-----------------	----

第一 波瀾に富んだ市政の歩み	三四
----------------	----

一 揺籃期の市政 二 拡充期の市政 三 震災復興期の市政 四 市域拡張期の市政 五 戦時下の市政 六 戦後の市政	三四
--	----

第二 三次にわたる市域の伸展	四三
----------------	----

一 海軍の拡張と市域 二 第一次拡張（衣笠村・田浦町の合併） 三 第二次拡張（久里浜村の合併） 四 第三次拡張（浦賀町ほか五カ町村の合併）	四三
---	----

第三 市議会と委員会（議決機関）	四六
------------------	----

一 市議会（市会）の組織と市議会（市会）議員 二 歴代議長・副議長とその選出	四六
--	----

三 市議会（市会）の権限 四 市参事会 五 常任委員会と特別委員会	
-----------------------------------	--

第四 市長と行政委員会（執行機関）	四七
-------------------	----

一 歴代市長・助役・収入役とその選任 二 市事務機構と補助職員 三 市庁舎	四七
---------------------------------------	----

第五 市民自治の発達	四七六
一 行政区と部会	四七六
二 町内会の活動	四八六
三 新しい自治会	四八六
第三節 九千倍に膨脹した財政	四八六
第一 財政の膨脹	四八六
一 一般会計と特別会計	四八六
二 財政需要の趨勢	四八六
三 歳入・歳出の内訳	四八六
第二 市税の変遷	四八六
一 市税制の変遷	四八六
二 市税の趨勢と内訳	四八六
第三 市債と市有財産の膨脹	四八六
一 市債の膨脹	四八六
二 市有財産の概況	四八六
第二章 戸口の趨勢と市街地の発展	五二
第一節 年代により地域によつて差のある戸口の増加	五二
第一 全国的水準をはるかに上廻る戸口の増加趨勢	五二
第二 人口の分布・密度と密集地の大きさ(集団規模)	五二
第三 関東とその外圏から集つた市民	五三
第四 軍都的人口構造から標準都市型構造へ	五三
第五 防衛基地色を強めつつある最近の動向	五四
第六 京浜間に多い人口の流動	五四
第二節 海岸埋立地と上町台地へ拡張した市街地	五四
第一 市中心の成り立ちと谷戸から谷壁へひろげられた住宅地	五四
第二 副市中心の形成	五四

第三節 すみやかだつた震災復興と問題をはらむ軍都転換	五六
第一 下町に大きかつた震災火災の被害	五六
第二 陸海軍の活動により安静を得た市民	五七
第三 非戦災と問題をはらむ軍都転換	五六
第三章 産業・経済の発展	五七
第一節 市制施行以前の横須賀と海軍工廠	五七
第一 開拓時代	五七
第二 建設のゆくえ	五九
第三 民間産業の展望とその反省	六〇
第四 田浦地区における海軍工廠	六〇
第二節 蔬菜栽培に発展した五〇年の農業	六二
第一 蔬菜栽培に代ろうとする本市の農業(明治時代)	六二
第二 発展に向ふ蔬菜農業(大正時代)	六三
第三 市域の拡張による農業の進展(昭和前期)	六三
第四 蔬菜栽培を中心とした酪農形態に進んだ農業(終戦後)	六七
第五 本市農業の大改革(農地改革)	六三
第六 本市農業の推移	六三
第三節 漁業基地として発展した五〇年の漁業	六四
第一 明治以前の江戸前の鯛	六四
第二 軍港によつて発展を阻止された本市の漁業(明治・大正のころ)	六四
第三 漁業地区の合併で発展に向ふ本市の漁業(昭和のころ)	六四

第四 漁業基地二つをもつ活気ある本市の漁業（終戦後）

六八六

第四節 本市五〇年の工業

六八三

第一 戦前における工業

六八三

- 一 明治から大正に至る経済状況
- 二 震災以前の工業
- 三 大正の後期から昭和五年に至る間の工業
- 四 満洲事変から支那事変に至る工業
- 五 戦前における工業

第二 戦後における工業

六八一

- 一 戦後インフレーションのころ
- 二 朝鮮動乱以降における工業
- 三 転換工場と本市工業界の飛躍
- 四 戦後一〇年の足どりと本市工業の現況

第五節 本市五〇年の労働事情

六九六

第一 戦前の労働事情

六九六

- 一 概況
- 二 明治から大正へ
- 三 第二次大戦に至るまで

第二 戦後の労働事情

七〇〇

- 一 雇傭問題
- 二 戦後の組合運動と労働条件

第六節 本市五〇年の商業経営

七四五

第一 戦前における商業

七四五

- 一 商業のむかしむかし
- 二 明治から大正に至る本市の商業界
- 三 震災以前の商業
- 四 終戦に至るまでの商業

第二 戦後における商業

七六〇

- 一 終戦以降の商業概観
- 二 本市の商業経営
- 三 本市の商店街

第七節 本市五〇年の金融事情

八〇九

第一 戦前の銀行業

八〇九

- 一 大正のころ
- 二 昭和の銀行業

第二 戦後の金融事情

八一六

第八節 社会的福利施設と商業機関

八二三

第一 公益質屋

八二三

第二 その他の社会的福祉施設

八二五

第三 商工会議所

八二五

第四 その他の商業機関の現況

八二八

第四章 港湾及び交通の発展

八三三

第一節 平和産業港湾都市の形成と港勢の伸展

八三三

第一 平和産業港湾都市の建設と諸問題

八三三

一 軍港の開放

八三三

二 横須賀港をめぐる諸問題

八三五

- 各港の概観
- 一 複雑な性格をもつ横須賀港
- 二 近代化におくれた長井漁港
- 三 餌イワシの佐島漁港

第二節 期待されている海運の振興

八四九

第一 出入港船舶の状況

八四九

- 一 低調な本市の海運業
- 二 長浦港
- 三 久里浜港
- 四 浦賀港

第二 港運事業の発達

八五五

第三 沿岸定期航路

八五八

第四 渡船について

八六二

第三節 規模の小さい河川と橋梁

八六四

第一 平作川

八六四

第二	橋梁	八六六
第四節	道路の整備とトンネルの発達	八六六
第一	効率に問題のある道路網	八六六
	一 新旧市域で異なる道路網の形状	八六六
	二 地形的制約の多い道路網の発達	八六六
三	効率の低い横須賀の道路	八六六
第二	道路網の整備	八七三
	一 道路法の制定まで	八七三
	二 交通状況を一変させた第三一号国道の開通	八七三
三	震災後の復興と都市計画	八八三
	四 戦後の道路事業	八八三
第三	内浦に目立つトンネル群	八八三
	一 明治時代後半	八八三
	二 海軍水道トンネルの通行許可	八八三
	三 第三二号国道のトンネルの開通	八八六
第四	神奈川県舗装道修理班	八八六
第五節	鉄道とバスの発展	八八六
第一	国鉄横須賀線	八八六
	一 横須賀線の開通	八八六
	二 複線化と電化	八八六
	三 横須賀線の延長	八八六
第二	京浜急行電鉄	八八六
	一 湘南電鉄の創業	八八六
	二 横浜―浦賀間開通	八八六
	三 横須賀自動車の併合	八八六
	四 久里浜線の開設	八八六
	五 武山線の敷設計画	八八六
	六 東京急行への発展と戦後の再編成	八八六
第三	市営電車敷設の計画	八八六
	七 三浦半島一周環状線の敷設計画	八八六
第四	乗合馬車	八八六
第五	乗合自動車	八八六

一 乗合自動車の初めのころ 二 京浜急行自動車部 三 三浦交通

第六節 一般運輸機関の発達

第一 市内旅客輸送

一人力車 二 一般乗用旅客自動車

第二 陸上貨物運送

一通運事業 二 貨物道路運送事業

第七節 交通流の変遷

第一 歩行者の交通流

一通勤圏の変遷 二 市内交通流

第二 車輛の交通流

第三 物資の流入

一 物資流入の門戸 二 蔬菜果実の入荷 三 魚介類の入荷

第八節 通信機関の発達

第一 新式郵便の成長

一 郵便局所の発展 二 郵便物の取扱 三 利用状況

第二 電気通信による通信能力の躍進

一 電信電話局所の発展 二 電信施設の整備 三 電話施設の整備

第五章 教育・文化及び観光の発展

第一節 近代教育の整備と拡大

第一 普通教育の躍進

一 小学校の充実 二 中学校の誕生 三 高等女学校と幼稚園 四 実業教育の発展 五 社会教育

第二 教育制度の拡充 九七

一 小学校教育の改善 二 中等教育の発展 三 青年訓練所と青年学校の誕生
四 関東大震災による災害教育施設の復興 五 特殊教育と各種学校

第三 戦時教育と国民錬成 九八

一 国民学校の誕生 二 中等学校 三 青年学校の義務制 四 学徒動員
五 学童疎開 六 体育錬成

第四 終戦後の教育 一〇一

一 戦時教育体制の終焉 二 本市の教育管理の状況 三 新しい学校 四
教育研究所の設置とその活動 五 教育現場における研究活動 六 新しい
教育施設 七 学校給食の発展 八 私立学校の発展 九 現職教育
一〇 P・T・Aの発足とその活動 一一 基地横須賀の特殊教育問題
一二 社会教育の新しい発足とその発展 一三 社会教育施設の拡充 一四
新しい体育の展開と体育会館の建設 一五 教育行政機構の変遷と教育委員会
制度 一六 教育行政における問題点 一七 教育の財政的推移

第二節 市民文化の変遷 一〇五

第一 文化の発展 一〇五

一 自然科学の面 二 人文科学の面 三 郷土研究の伸展 四 俳壇の展望
五 文芸と詩

第二 芸能界の発展 一〇六

一 舞踊 二 美術 三 音楽 四 華・茶道

第三節 本市の宗教法人

第一 本市での宗教法人	一〇五
第二 本市での神社	一〇七
第三 本市での寺院	一〇八
第四 本市での教会	一〇七
第四節 観光の横須賀	一〇九
第一 終戦後解放された観光資源とその開拓	一〇九
第二 史蹟や名勝の今昔	一〇九
第三 進みゆく観光の施設と行事	一〇九
第四 横須賀十景	一一〇

第六章 市民生活の発展

第一節 保健衛生状況の伸展とめぐまれている医療施設

第一 市民の保健衛生状態の伸展	一一七
一 伝染病患者と死亡者	一一七
二 結核患者と死亡者	一一八
第二 進みゆく予防衛生	一二〇
一 保健所	一二〇
二 予防衛生の活動	一二〇
第三 めぐまれた医療衛生施設	一二四
一 医療施設	一二四
二 国立療養所久里浜病院	一二四
三 国立横須賀病院	一二四
四 市立横須賀病院	一二四
五 市立坂本病院	一二四
六 非現業共済組合連合会横須賀共済病院	一二四
七 非現業共済組合連合会田浦共済病院	一二四
八 社会福祉法人日本医療伝道会衣笠病院	一二四
九 聖ヨゼフ病院	一二四
一〇 財団法人湘南福祉会湘南病院	一二四
一一 浦賀造船所健康	一二四

保険組合浦賀船渠病院

第四 し尿塵芥の清掃区域の拡大……………二二八

一 し尿の処理 二 塵芥の処理

第五 整備されてゆく火葬場……………二四〇

一 市制施行以前 二 市制施行以後 三 市域拡大後

第六 馬門山の市営墓地……………二四四

第二節 市民を守る諸機関(公安)

第一 市民を守る三つの警察署……………二四五

一 本市警察の沿革 二 自治体警察の誕生とその廃止 三 市民生活と警察

四 犯罪状況

第二 火災から市民を守る消防の活動……………二五五

一 沿革 二 火災状況

第三 裁判所……………二五九

一 沿革 二 戦後の裁判所

第四 検察庁……………二六三

第五 横浜法務局横須賀支局……………二六四

第六 横須賀刑務所……………二六七

第七 久里浜少年院……………二六八

第三節 年々不足する住宅とその対策

第一 明治・大正のころの住宅難……………二六九

第二 大震災とその後の住宅対策……………二七〇

一 大震災の被害 二 震災後の住宅対策

第三 大正の末から昭和への住宅増加……………二七三

第四 終戦後の住宅状況と一万戸以上の不足……………二七四

一 住宅調査 二 昭和二三年住宅調査の結果 三 昭和二六年県住宅調査の結果

四 昭和二八年住宅統計調査の結果 五 戦後の住宅事情……………二八〇

第五 本市の住宅対策……………二八〇

一 市営住宅の建造 二 本市の住宅対策

第六 横須賀市住宅公社とその事業……………二八五

一 公社の設立 二 公社の事業

第四節 市民の命津川・相模川の水

第一 本市最初の水道……………二八七

第二 本市水道の布設時代……………二八八

第三 大震災と本市水道……………二八九

第四 水道拡張と県営水道からの受水……………二九一

一 田浦・衣笠への拡張 二 県営水道からの受水

第五 困難な水道の拡張……………二九四

第六 旧軍港水道の全面的移譲とその後の拡張……………二九六

第七 地方公営企業法による公営水道企業……………二九八

第八 県営水道……………三〇一

第五節 明るい市民生活と電気・ガス

第一 電気……………三〇四

一 横須賀の電燈会社 二 東京電燈会社の時代 三 関東配電会社の時代

四 東京電力会社の時代

第二	ガス	三二
一	横須賀のガス会社	三二
二	関東瓦斯の時代	三三
三	東京瓦斯の時代	三四
第六節	社会福祉	三六
第一	民生委員制度	三六
第二	社会福祉行政	三七
一	福祉事務所の事務	三七
二	福祉事務所以外の事務	三八
第三	生活保護	三八
第四	身体障害者保護	三九
第五	児童福祉	三九
一	保育施設	三九
二	母子施設	四〇
三	養護施設	四一
四	児童相談所	四二
五	厚生施設	四三
第六	福利事業	四四
一	職業紹介と授産	四四
二	福利施設	四五
第七	援護事業	四六
第八	罹災救助	四七
第九	国民健康保険事業の開始	四八
第七章	本市における海・陸軍の発展	四九
第一節	海軍の発展	五〇
第一	海軍草創期	五〇
第二	横須賀鎮守府の開設	五一
第三	海軍革新期	五二
第四	日清戦役とその後	五三
第五	日露戦役前後	五四
第六	日露戦役後の軍拡と軍縮	五五
第七	海軍の航空	五六
第八	終戦時の海軍施設	五七
第二節	陸軍の発展	五八
第一	砲台の築造	五八
第二	要塞砲兵聯隊	五九
第三	東京湾要塞司令部	六〇
第四	陸軍重砲兵学校	六一
第五	築城支部と兵器支廠	六二
第六	横須賀陸軍病院	六三
第七	火薬庫	六四

第八章	軍都横須賀から新しい横須賀へ	六五
-----	----------------	----

第一節	軍港都市横須賀	六五
第一	本市の誕生と軍都色の産衣	六五
第二	臨時市是調査委員会の活動	六六
第三	震災後の都市計画	六七
第四	大横須賀建設委員会の活動と田浦・衣笠の合併	六八
第五	横須賀市市是調査会の設置	六九
第六	市是の確立と大軍港都市建設委員会	七〇
第七	隣接六カ町村の編入	七一
第八	市民の決戦体制	七二

第二節 平和産業港湾都市横須賀	二六九
第一 更生委員会と転換準備委員会	二六九
一 更生委員会の発足	二六九
二 横須賀旧軍港転換準備委員会	二七〇
第二 旧軍港市転換法の実施	二七〇
第三節 宿命的国防都市横須賀	二七三
第一 横須賀と駐留軍	二七三
第二 横須賀と自衛隊	二七四
第四節 新しい横須賀	二七七
市史年表	二九六
あとがき	一
索引	一